

段掘りで、まず長さ二・三^{メートル}前後、幅一・四〇^{メートル}の長楕円形で、深さ〇・二六^{メートル}以上の横を掘り、その中央部に棺を掘り込んである。棺は頭位小口に一枚石を立て、足位側の壁は傾斜をつけている。床面は長さが一・二一^{メートル}で、幅は〇・二五^{メートル}と非常に狭い。蓋石は五枚の板石からなり、すき間は小形の石材でふさいでいる。主軸の方位はS—79—Wである。

これらの埋葬施設のうち、調査区南部の丘陵屈曲部に位置する石棺墓二基・石蓋土壙墓四基・土壙墓一基の一群を区画するように、南西と南東の一部で、直交すると推定される溝が検出された(第35図参照)。これは全体として方形周溝墓をなすものと考えられるが、規模は不明である。

遺跡の性格

当遺跡で確認された弥生時代の墓地は中期と後期に属するものである。後期の墓地は徳永川の上遺跡でも発見されているが、その内容はやや異なるものである。徳永川の上遺跡の場合、墓地は一〇基以上の墳丘墓からなり、それぞれの墳丘墓内に五—三基の埋葬施設が営まれていた。また、中心的な埋葬施設には銅鏡・装身具・鉄製品などが豊富に副葬されていた。しかし、北垣遺跡の場合、南部で方形周溝墓が一基検出されたが、全体としては集団墓の傾向を示し、副葬品も若干の鉄製品と玉類が一部にみられるにとどまった。これらのことから、当遺跡に葬られた人々は節丸地域の一集落の代表者程度のものであろう。

六 居屋敷遺跡

この遺跡は、神手遺跡・徳永川の上遺跡などと同様に祓川右岸の段丘上にある。田中から徳永へ通じる町

道が川を渡ってすぐ切り通しとなるが、そのすぐ北側にあたる。標高は約二九^{メートル}。

調査の契機と

遺跡の概要

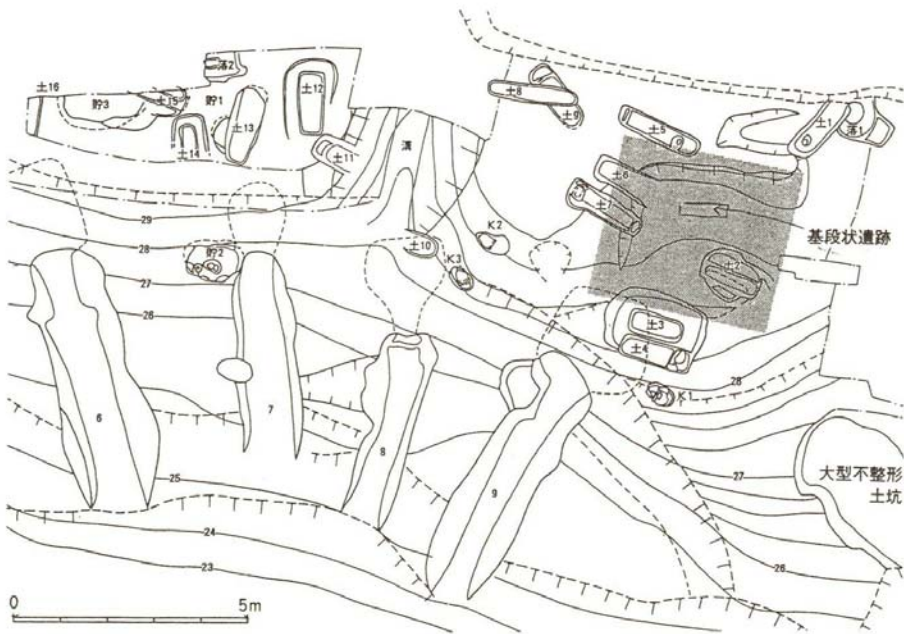
この遺跡も一般国道一〇号椎田道路建設に先立って、平成元年に発掘調査が実施されたものである。この遺跡付近から北にかけては、かつて祓川に浸食されたようで、低地が大きく東へ入り込む地形となる。実際に発掘を行った部分は段丘斜面、および段丘上の平坦面で、調査面積は約一〇〇〇平方^{メートル}。この調査で確認された遺構は斜面で、古墳時代の横穴・須恵器窯跡（後述）、そして平坦部で時期不明の落とし穴状土坑、弥生時代の貯蔵穴・土壙墓、そして近・現代の建物跡などである。

遺構の詳細

近年発掘調例が増している落とし穴状土坑は二基が発見された。一号土坑は直径一^{メートル}前後の長円形プランで、深さは〇・六^{メートル}が残る。床面に直径〇・五^{メートル}前後、深さ〇・六^{メートル}の小穴があり、内部に小礫が入っていた。二号土坑は調査区外へ続くためにすべてを発掘していないが、長方形と思われる平面形をし、やはり床面に深さ〇・七^{メートル}の小穴が掘り込まれる。この種の遺構は概して出土遺物に乏しく、所属時期がはっきりしないことが多いが、大分県三光村佐知遺跡では同種の土坑から縄文後期の土器が出土して年代の一端がうかがえる。

弥生時代の遺構の中、貯蔵穴は三基調査された。口径・深さはそれぞれ〇・七^{メートル}と一・四^{メートル}前後と〇・三^{メートル}、二^{メートル}と一・一^{メートル}と規模はいずれも異なるが、ほぼ円形プランで断面形状は他遺跡例と同様に袋状である。出土遺物は乏しいが、周辺からは前期末ないし中期初頭ごろの土器が採集されており、ほぼその時期に営まれたものと思われる。

調査対象地内の狭い平坦面の全面に墓地が広がる。一六基の土壙墓を確認し、窯跡周辺の道路予定地外で



第37図 居屋敷遺跡土壙墓・貯蔵穴実測図

もそれらしい遺構を検出しており、広範に造営されていたようである。主軸方位は等高線と平行あるいは直角に近いものなどが混在しており、そこにある種の傾向をうかがい知るには至っていない。形態には平面長方形の墓壙の中に埋葬部を掘削するもの（二段墓壙）と埋葬部のみのもとのとがあるが、開墾などの後世の地形改変もあり、現状が直ちに本来の姿を反映しているものとはいえない。近隣の例では両者の形態がある。埋葬部の規模は幅が〇・五メートル前後、長さが一・一〜一・九メートルほどの大きさで、多くが（隅丸）長方形、一部は長円形に近い平面形で、中には枕を付設する例、木製の板材（木棺）を使用した痕跡も見られた（第37図参照）。

副埋葬遺物は一部の土壙墓から土器が

出土している。これは墓壙上に置かれていたものが、木棺の腐朽によって転落したような状態であった。また、同様に幾つかの土壙墓では大小の礫が埋土上層から発見されているが、これは墓の位置を示す「標石」と呼ばれるものである。石製品や金属器は全く出土していない。

甕棺は小児棺と呼ばれる小型のもので三基が確認された。中の二基は二個体を用いた合わせ口甕棺で、一基はすでに抜き取られたものか、単棺であった。上半部は既に失われており、下半のみが残存していた。これも出土遺物はない。

以上の土壙墓・甕棺は混在しており、ほぼ前後して営まれたものと思われ、出土土器も中期前半から半ばと呼ばれる時期に属するものである。

遺跡の性格

以上のように、この遺跡では恐らく縄文時代に使用されたと思われる落とし穴状の土坑、そして弥生前期末から中期初頭ごろの貯蔵穴群など、神手遺跡や川の上遺跡と同様な内容を有しており、これら集落の相互の関係が今後の課題である。先の遺跡と異なる点は中期前半以降に営まれた墓地の存在である。この遺跡のように群集する墓地は卑近な位置で未発見のようであり、ここが墓所として祇川右岸、徳永遺跡群の中で重要な役割を果たしていたといえる。

七 その他の遺跡

発掘調査によってその性格がある程度判明した遺跡以外にも、分布調査などによって弥生時代の遺跡の所在が確認されているものが幾つかある。